

令和4年度 東久留米市立 第七小学校

学校評価報告書

学校教育目標	○かしこく(重点)	教育ビジョン	【目指す学校像】	子供たちが安心して通うことができ、魅力ある授業がたくさんある学校
	○やさしく		【目指す児童・生徒像】	自分の思いを伝え合い、主体的に行動する子供
	○たくましく		【目指す教師像】	子供たちに愛情をもって接することができる教師 ・ 学び続ける教師 ・ 組織として共に協力する教師
前年度までの学校経営上の成果と課題	成果 ・校内研究において、国語科を研究することにより、教員が教材研究の大切さに気づき、授業改善の意識を高めることができた。 課題 ・コロナウイルスの感染予防対策により、従来のような体験的・対話的指導ができない場面が見られた。			

東久留米市第2次教育振興基本計画				中期経営目標 (令和6年度までの3年間)	短期経営目標 (1年間)	評価指標・評価基準		自己評価		学校関係者評価		次年度の方策	
No.	三つの柱	基本施策	今年度学校で重点を置く「具体的施策」		取組指標	成果指標	取組	成果	評価	コメント			
1	I	健全育成	規範意識や他人への思いやりなど豊かな心を育む教育の推進	規範意識と豊かな人間関係を育む教育	他人を思いやる心や正義感、公正さを重んじる児童の育成を図る。	「七つのやくそく」や新しい生活様式を守ると共に、自分や友達のためにルールを守って行動できる児童の育成を図る。	①「七つのやくそく」を守ると共に新しい生活様式を状況に合わせて行えるように継続的・組織的に指導する。 ②放送委員会や健康委員会の活動を通して新しい生活様式や状況に合わせた行動を促す。	「七つのやくそく」や新しい生活様式を守っている児童 A:80%以上 B:60%以上 C:40%以上 D:40%未満	A 4.0	A 3.8	A 3.9	・児童たちは、学校のきまりを守り、規則正しい学校生活を送っている。 ・「やくそく」が生活の中にきちんと入っていくような指導は、とてもよい。 ・他人を思いやる心が育っている。 ・さらに、1割の子供が守れるとよい。	・年間指導計画に基づく道徳の授業と共に全教育活動を通して、規範意識と思いやりの心を育む。 ・養護教諭をはじめ、全教員の指導により、「七つのやくそく」や新しい生活様式を状況に合わせて行動しようとする意識を高める。 ・放送委員会や健康委員会の呼びかけなどにより、新しい生活様式を状況に合わせて行動できる児童の意識を促す。
2	I	健全育成	個性を認め合う教育の推進	自己肯定感・自己有用感の醸成	異学年集団による活動を通して社会性や連帯性を育成すると共に、自己肯定感・自己有用感の醸成を図る。	異学年集団による活動を通して社会性や連帯性を育成すると共に、自己肯定感・自己有用感の醸成を図る。	①代表委員会の「心のふれあいポスト」の取り組みから友達の良いさ気付く機会を設ける。 ②兄弟学級の交流活動を年間3回行う。 ③子供まつり等の学校行事において児童が個性を発揮できる場面を設定する。	自分も他者も大切にしたいと考えている児童 A:80%以上 B:60%以上 C:40%以上 D:40%未満	A 3.9	A 3.9	A 3.9	・コロナ禍で、先生方の取組は大変だったと思うが、児童は学校生活を楽しみ大きく成長しているようだ。 ・異学年集団による活動で、連帯性を養成している。 ・兄弟学級等の上下のつながりが、とても大切な取組だと考える。	・代表委員会による心のふれあいポストや、各学級での取組によりお互いに認め合う活動を継続する。 ・児童の発意、発想を大切に集活活動や、子供祭りなど工夫して個性を発揮できる場を設定していく。
3	I	健全育成	いじめ問題への対応	いじめ防止対策推進基本方針に基づいた取り組みの推進	「学校いじめ防止基本方針」に則り、偏見、差別を許さない学校風土を創り上げる。	定期的ないじめ防止に関わる道徳の授業を実施し、年3回のアンケートによりいじめの早期発見・解決を図る。	①毎学期のアンケートやSCIによる面接等と校内で連携して、即時対応を行う。 ②いじめ防止対策委員会を中心に、関係機関と連携して問題解決にあたる。	いじめはしないし見過ごさないと考えている児童 A:80%以上 B:60%以上 C:40%以上 D:40%未満	A 4.0	A 3.8	A 3.8	・いじめ対策や取組は、七小はとても大事に取り組まれていると思う。 ・保護者には、学校での対応が十分に理解ができていないように思われる。 ・1割の児童の意識を、さらに高める取組が必要である。	・今後もアンケートの実施やSCの活用を通し、児童、保護者が相談しやすい体制づくりを行い、いじめの未然防止や、早期発見・早期解決に努める。また、その取組を学校だより等を通じて、発信し、理解を進めていく。 ・特別の教科・道徳を通して、いじめ根絶のための授業実践を計画的に行うと共に教育活動全体を通して、「いじめは許さない」という指導を行う。
4	I	健全育成	安全・安心な学校づくり	児童・生徒の主体的な取組	児童の主体的な取り組みにより、全ての児童が安心して生活できる環境をつくる。	代表委員会の活動を通して、児童自らがいじめの防止に取り組む態度の育成を図る。	①代表委員会による人権集会でいじめの防止に取り組む。 ②4年生以上が人権作文や標語・ポスターを作成する。	学校では安心して学習・生活できると考えている児童 A:80%以上 B:60%以上 C:40%以上 D:40%未満	A 3.9	A 3.8	A 3.8	・学校で、安心・安全に学習ができています。 ・ポスター等人権問題を児童が自らの考えを形にできる取組がよい。	・今年度は、4年生以上が人権の標語・ポスター・作文等への取組と共に、朝会等を通して、発達段階に合わせて人権意識を高めることができた。 ・次年度も人権教育に対して引き続き、各学年と取組や代表委員会による人権集会への活動等を通して、自分も友達も大切にすることを高めると共に、行動できる場を設定していく。
5	I	健全育成	個性を認め合う教育の推進	教育相談体制の充実	不登校0(ゼロ)を達成する。	適切な情報交換や児童理解をもとに、組織として共に協力し、外部機関とも連携して課題の解決にあたる。	①担任・学年・校内の教員やSC・相談室等相談ができる機会を折りに触れて紹介する。 ②個別支援チームの作成と生活指導全体会・夕会を活用した情報共有を行う。 ③校内委員会やSC・SSW他、関係機関と連携して多様な手立てで解決を図る。	困ったときに相談できる大人がいると考えている児童 A:80%以上 B:60%以上 C:40%以上 D:40%未満	A 3.9	A 3.8	A 3.6	・外部の相談機関と協力ができている。 ・児童と担任以外にも、様々な所で、相談を気軽にできる体制があるのがよい。 ・児童は、相談しやすさを求めている。 ・今後さらに、学校以外に家族や、その他多様な相談の機会が広がっていくとよい。	・今年度は月に1回の校内委員会や、必要に応じて臨時の校内委員会を開くことで、組織的な対応を検討することができた。 ・特別支援教育コーディネーターを中心に、月に1回の校内委員会や、毎週の運営委員会等で、組織的な対応を検討を行い、生活指導全体会や夕会等で情報共有し、チームとして対応し、全児童が安心して通える学校づくりを行う。 ・校内委員会やケース会に、SCや巡回心理士等を計画的に出席を計画し、さらなる連携を図っていく。
6	I	健全育成	生涯にわたって育む健やかな体づくり	体力向上に関する指導の充実	新しい生活様式と共に、体力向上のための主体的な活動ができる児童の育成を図る。	新しい生活様式を日常化し、縄跳び週間や持久走旬間、クラス遊び等による外遊びに参加し、体力向上を楽しむ児童の育成を図る。	①マスク、咳エチケット、手洗い、ソーシャルディスタンス、状況に合わせた適切な行動の徹底。 ②持久走旬間・縄跳び週間において児童の主体的な取り組みを促す。	運動に親しみ体力が向上したと考えている児童 A:80%以上 B:60%以上 C:40%以上 D:40%未満	A 4.0	A 3.7	A 4.0	・コロナ禍の中、先生方の取組や努力が児童の体を守っていると感じる。 ・教師も保護者も満足な結果となっていない。 ・児童の活動欲求は満たされていない。 ・今後、クラスでまとまって出来る活動が増えるとうい。	・体力向上については、引き続き持久走旬間、縄跳び週間等の取り組みを行うと共に、外遊びを積極的に推奨していく。 ・健康づくりでは新しい生活様式を継続して指導し、クラス遊び等による外遊びを促し体力向上を推進する。
7	II	学力向上	確かな学力の育成	基礎的・基本的な学力の定着と学ぶ意欲の向上	基礎的な知識及び技能の確実な習得と思考力・判断力・表現力の向上を図る。	校内漢字検定の着実な実施と習熟度別授業の充実により、基礎的・基本的な学力の定着と学ぶ意欲の向上を図る。	①年3回の校内漢字検定や朝学習の東京ベシックドリルの継続的に行う。 ②対話活動や問題解決学習を活用した授業展開を工夫する。	学んだことが身に付いたと実感している児童 A:80%以上 B:60%以上 C:40%以上 D:40%未満	A 3.9	A 3.7	A 3.9	・基礎学力の定着と学ぶ意欲は、向上していると思われる。 ・7小の漢検チャレンジや、朝学習、ベシックドリルの取組は基礎力を育むために大切である。	・東京ベシックドリルのテストでは、1学期よりも2学期の項目で、得点群の上昇が見られた。次年度も、東京ベシックドリルは引き続き、朝学習や放課後の学習支援で扱い、基礎学力の向上を目指す。 ・校内漢字検定は、児童の学習意欲につながっている。次年度も、計画的に設定していく。 ・学力パワーアップサポーターを活用し、個別指導の充実と、補習教室でもフォローを行う。
8	II	学力向上	確かな学力の育成	各種学力調査の活用	学力調査の分析と課題の共通理解をもとに、主体的・対話的で深い学びに取り組む児童を育成する	各教科の中で、積極的に言語活動を取り入れると共に、児童が主体的に参加できる授業づくりを行う。	①校内研究・特別活動を通して自分の思いを伝え合う力を育成する。 ②一人一台タブレットやICTを活用した授業を全員が行う。	授業は分かりやすいと考えている児童 A:80%以上 B:60%以上 C:40%以上 D:40%未満	A 4.0	A 3.7	A 3.7	・一人一人が授業によって学力向上につながっていると思う。 ・コロナ禍での学習や言語活動の推進は困難だと思われるが、保護者のタブレット活用の期待は大きい。 ・今後、タブレットのさらなる活用ができるとよいと思う。	・今年度は、東久留米市教育委員会の研究奨励校として、特別活動を校内研究領域とし、自分の思いを伝え合う力の育成に取り組む。国語の「話す、聞く」活動や、学級活動の話合い活動を通して、主体的に伝え合う児童の力を高めていく。 ・各学年、学級毎にタブレットやICTを活用した授業を引き続き推進していく。
9	III	教育環境の整備	体験的な活動	地域や外部人材を生かした体験的な学習を充実させる	地域や外部人材を生かした体験的な学習を充実させる。多様な関わりを通して学習内容の定着を図る。	学校や地域の特色を生かした伝統文化の体験や地域の施設見学を通して地域を大切にすることの育成を図る。	①各学年、年1回以上、外部人材を活用した授業を実施する。 ②昔遊び(1・2年生)、和太鼓(3学年)、ごみの収集体験(4年)、お米の学校(5年)、琴の演奏(6年生・サマースクール)等の指導を実施する。	地域や外部人材に楽しんでいる児童 A:80%以上 B:60%以上 C:40%以上 D:40%未満	A 4.0	A 3.9	A 4.0	・地域や外部人材の活用による豊かな学習の成果が見られる。 ・94%の児童が、「楽しく体験した」と答えている。 ・大人になって、「豊かな学びであった」と、気付くことがあるので続けてほしい。 ・マチコミでの配信は、学校理解に大きく役立った。	・サマースクール、6年生「原爆先生」、5年生「お米の学校」、4年生「サイエンスドラゴン」、クラブ活動や3年生の和太鼓指導、3年生「スーパー見学」、2年生「バス見学」、全学年「お話の会」等、地域や外部人材と打ち合わせを密に行い、実施方法等を工夫し、積極的に体験活動等を実施していく。
10	III	教育環境の整備	特別支援教育の充実	特別支援教育の充実	特別支援学級設置校の特性を生かし、障害者教育の充実を図る。	特別支援学級と通常学級の交流を工夫すると共に、校内委員会を活用した個に応じた支援の充実を図る。	①年2回の生活指導全体会と月一回のケース会議により児童の共通理解を図る。 ②特別支援学級と通常学級の交流や共同学習を学期一回以上行う。	特別支援学級との交流や共同学習で協力できたと考えている児童 A:80%以上 B:60%以上 C:40%以上 D:40%未満	A 3.6	B 3.2	A 3.5	・コロナ禍で、対応や対策が大変な中、通常級との交流も復活してよく取り組まれたと思う。 ・共同学習で、協力できるとよい。 ・児童たちは、他学年、他学級との交流を求めているが、コロナ禍で、不十分だったと思われる。 ・特別支援の先生の意見も取り入れていったらいいと思う。	・特別支援学校との副籍交流やしらゆり学級の紹介集会、通常学級との行事の取組等を行い、共生社会を担う児童の育成を行う。 ・しらゆり学級との交流や特別支援学級・教室担任による理解教育については方法や場所等を工夫し、「共に生きる仲間」としての意識を引き続き育てていく。 ・校内委員会やケース会議を活用し、個に応じた支援を充実と、校内での共通理解を進めていく。